Lynn M. Thomas,

Politics of the Womb: Women, Reproduction, and the State in Kenya.

Berkeley: University of California Press, 2003, xvi+300pp.

石井洋子（いしいようこ）

I

『子宮のポリティックス』と題した本書は，ケニア中央部・ケニア山東麓に住まうメル人社会（Meru）の20世紀を舞台として，政治的な問題とされつづけた，女性の生殖や性行動をめぐる諸議論を複眼的に読み解くことによって，アフリカ史への新たな理解を導こうとする書である。著者リン・トーマスはアメリカ合衆国シアトルのワシントン大学（University of Washington）の助教授であり，アフリカ史やジェンダーの研究をおこなう歴史学者である。

トーマスが同書を出版した背景には，1997年にミシガン大学（ミシガン州）に受理された博士論文「生殖をめぐる規制――ケニア農村部，1920～70年代における出生力と性をめぐる国家干渉――」（歴史学）［Thomas 1997］の存在が欠かせない。同論文は，「独立後のケニアにおける婚姻法」を学んだ学部時代からの学問的な興味を根底におき，アフリカ労働史を研究するフレドリック・クーパー教授（Frederick Cooper）の教えを受け，植民地時代への史的理解を深めた415ページの大作である。トーマスは，そこでまとめた歴史研究を皮切りに，現在におけるさまざまな問題（人口問題やエイズ問題など）への発言を，アフリカの広範なトピックを扱う学術雑誌『アフリカ歴史研究』（*Journal of African History*）などでおこなってきた［Thomas 1998；2000］。そして，それらの研究の集大成として本書を完成させたのである。

以下，本書の目次を概観してみよう。

序
第1章　帝国植民地と「女性の領域」
第2章　植民地政府による意識向上と若い助産婦
第3章　マウマウと「自らを割礼する」少女たち
第4章　植民地時代末期の慣習と規律ない女子生徒たち
第5章　ポストコロニアル・ナショナリズムと「現代」のシングル・マザーたち
結　論

II

本書のタイトルに似た『アフリカの国家――胃袋のポリティックス――』［Bayart 1993］という著作があるが，トーマスは，本書を執筆する過程で同書から大きな影響を受けたと述べている。胃袋のポリティックスは，飢餓というアフリカ人が抱える問題を背景に，食糧の再配分や資源の消費という行為を通じて，富と権力による階層化を分析した研究である。一方，子宮のポリティックスは，性の規範という共通の問題意識を背景に，生殖力と倫理的な野心を培うさまざまな営みに目を向け，社会関係の形成史を分析した研究である。トーマスは，そうした身体や倫理という，人間生活の中核となる事柄に注目し，さまざまな立場の主張が交錯していった過程を捉えた。そして，ジェンダーや世代，キンシップといった従来の関わりが，新旧の価値を織りなす新たな状況のなかに見出された様子を明らかにし，それがアフリカ史を編纂するうえで重要な視点を提供すると述べている。

ではさっそく，本書の流れの要点を押さえる作業に入ろう。本書は，1929年のメル人社会において，女子割礼の禁止に抗議するダンスと歌（*Muthirigu*）が繰り広げられたという出来事から語られる。それは，本書のテーマとして一貫して論じられる，性と生殖の統治に対する抵抗力を象徴した出来事であり，ケニアのイギリス植民地時代（1895～1963年）に大

きな議論を巻き起こした「女子割礼論争」(1928～31年）の最中に起きた。

著者の視点は，この女子割礼論争から常に発せられているが，同論争とは，成女儀礼(イニシエーション）にともなう「性器切除」に反対する，宣教師や植民地政府との議論の応酬である。また，メル人社会の成女儀礼は思春期を迎えた5～6年後という遅い時期におこなわれるが，そうした社会で頻繁に認められる，成女儀礼を済ませていない少女の「中絶」という社会的慣行をめぐっても激しい議論が飛び交った。例えば，キリスト教宣教師たちは，性器切除と中絶という行為は難産や不妊症という身体的な悪影響をもたらすだけでなく，女性の地位を低める「蛮行」であると非難した。また植民地政府は人口が抑制され，ひいては労働者の供給が滞ってしまうことを懸念したという。

しかし，本書で繰り返し述べられているように，成女儀礼や中絶の実践は社会文化的に重要な意味を持つものである。つまりそれは，少女を大人の女性にし，社会的に認められた者の出産を確実にすること，さらには女性を秩序づけるための階層化を生み出す役割を有しているということである。こうした認識の乖離を根底に引きずりながらも，イギリス植民地政府は性器切除の手術内容を小規模なものにし，中絶人口の減少を目指して成女儀礼の年齢を下げるためのさまざまな試みをおこなった。本書の大部分は，そうした試みをいくつかの局面から捉え直す作業にあてられている。

そもそも，著者の興味の中心である，性や生殖をめぐる政治史を扱った研究は決して新しいものではない。むしろ，1960年代後半より始まったフェミニズムの興隆を背景に，アフリカ人女性やジェンダー関係に光を当てた研究には欠かせないトピックとして諸所に描かれてきたと言えよう。しかし，著者によると，それらの研究の多くは植民地政府による抑圧と地域住民の反発という二項対立のなかに収められ，アフリカ人とヨーロッパ人の衝突の結果，前者の「伝統」が崩壊したという一方向的なインパクトばかりが強調されてしまっていると述べる。同時に，従来の研究の盲点は植民地政府や独立後のケニア政府が生殖の問題に干渉しつづけた政治的プロセスを細やかに描いていないことにあると指摘している。

本書は，こうした先行研究の限界を明確にしたうえで，メル人社会が一方的な圧力を受けるだけでなくその圧力に積極的に対応していった姿に注目し，「子宮のポリティックス」という観点から，ジェンダーや世代をめぐるイデオロギーや諸関係が変化した様子を捉えている。

ではつづけて章ごとの流れを見ていこう。著者は，第1章と第2章において1920～30年代のメル人社会を取り上げている。そして，イギリス植民地政府が性器切除と中絶の被害を減少させるためにおこなったキャンペーンに注目し，その政治的な背景を記述的に論じている。

まず，第1章では，イギリス人行政官やキリスト教宣教師（メソジスト）の主張を取り上げると同時に，間接統治機関であり，地元有力者（長老）たちによって構成される原住民評議会（LNC）との関わりにも言及した。同章のタイトルにもあるように，性や生殖をめぐる問題は「女性の領域」であるという地元の認識が政府によって次第に歪められていった訳だが，それでも著者はこれらの政府の取り組みを「白人」対「黒人」の対立として語ることはできないと主張している。また第2章では，植民地政府による産科病棟の建設と助産婦の育成という試みがどのようなプロセスにおいて実現したのかについて論じている。ここでもまた，病院での出産という新たな状況が従来の慣行を変えていくだろうという政府の目論見があった。しかし実際には，助産婦としての教育を首都ナイロビで受けさせることや，病院でのお産という行為に対して，地元の理解を容易に得られなかった様子を論じている。

第3章では，独立前夜の「マウマウの戦い」(注1)が終息に向かった1956年に視点が移される。ここでの最大の注目点は，同年に植民地政府が性器切除を根絶するための禁止令を発したにもかかわらず，少女たちが自らカミソリを持ち，割礼をおこなうという行為が蔓延した状況についてである。結局，政府による禁止令は性器切除をより秘密裏のものにしてしまったと批判している。同章では，地域住民が禁

止令を否定していった背景を詳細に取り上げ，性器切除という行為が変わらずに「女性の領域」にあり，重要な生殖に関わる実践であるということを論じた。同時に，植民地政府を助ける間接統治者であるメル人長老たちの権威が失われつつあることも指摘している。

第４章から第５章では，1950～60年代に整備された，性と生殖をめぐる２つの法について，その制定プロセスと地域住民の反応を記述的に論じている。これらの法は子供に対する男性の責任を問うものであり，著者は，その状況を植民地行政官や政治家，女性組織や福祉組織，地元の若者や親たちなど，多くの立場による議論から捉え直している。

まず，第４章についてだが，前提の理解として，政府が成女儀礼の低年齢化を勧めていった結果，婚前妊娠が増加したという事実に触れている。そのため地元の長老たちは，婚前妊娠への代償として，相手男性が速やかに婚姻手続きに移らない場合，現金の支払いを命ずるという慣習法を制定したという。植民地政府の援護を受けた，同慣習法の制定は若者の道徳や性行為の統制を通じて政府の力を再認識させるための方策でもあった。しかし，原告の女性の羞恥心や教育を受けた若者たちの抵抗によって同慣習法の効力は十分に発揮されなかったと論じている。転じて，第５章では，1959年に「父子関係決定法」（Affiliation Act）が制定されたプロセスについて論じている。同法は，増加するシングル・マザーが非嫡出子である子供の父親を決定し，援助を受けることを可能にした法令である。ここでもまた，女性の性や生殖を統制することや，生まれた子供の責任を持つものは誰かをめぐり多くの議論がなされたことが指摘されている。

そして最終章は，独立後の人口政策や家族計画，エイズ対策などの問題に言及している。ここで著者は，これらの問題に対する国内外の反応として，アフリカは不道徳で不健康な場所であるというステレオ・タイプの見方があると指摘し，先進国とアフリカの関係，さらにはアフリカ内部においても不平等な関係があると論じている。以上，著者は，メル人社会における生殖をめぐるさまざまな取り組みを通じて，新しいものと古いもの，さらには内的なものと外的なものの価値観が混ざり合いながらも，倫理的な秩序がかたち作られていったのだと総括している。

Ⅲ

本書は，20世紀を通じたケニア山東麓の地域社会をバックグラウンドとし，複雑な交渉やもつれを複眼的に検討したアフリカ史学の研究業績である。

こうした研究をまとめるうえで欠かせないのは，著者があらゆる場面を想定し，限られた資料を幅広く集めて活用するという姿勢であろう。事実，トーマスの視点は，地域や世帯，病院やトレーニングセンター，原住民評議会やナイロビの行政機関だけでなく，ロンドンの下院や国際援助機関，さらにはニューヨーク，カイロ，北京での国際会議場にまで至る。また，実際に使用した文書は，植民地政府や宣教師のレポート，行政官の書簡や私書，国会での議事録や新聞，裁判官資料など多岐に及ぶ。評者自身，同地域の周辺で歴史調査を実施した経験があるが，重要資料のなかには，紛失したものや，宗主国に持ち帰られたものも少なくない。また，劣悪な保管状況に長期間放置され判読不能のものも多い。そうした環境で古文書調査を敢行したことへの努力は純粋な意味で評価されよう。

その他，本書で使用したデータには，イギリス人４名を含め，130人余りを対象にしておこなったインタビュー（1990年前後に実施）の内容が盛り込まれていることも付け加えておかねばならない。ここでひとつ，問題点を指摘するならば，聞き取り調査に関わる状況説明が十分ではないという点である。現地社会で調査をおこなう際，調査者の年齢や性別，個人的な態度や地域住民との関わり等がインタビュー内容に与える影響は少なくない。ましてや，本書で扱ったセクシュアリティーに関わる内容を聞き取る場合には，質問相手との世代やジェンダー関係の相違も重要な留意事項となる。そうした状況を理解したうえで，対象社会の広範な社会・文化的状況，そして調査者と被調査者の関係についての記述

に厚みを持たせる作業はとても大切である。

本書は，子孫繁栄と社会の秩序を求めたメル人社会，そして社会の活性化を求めた政府の錯綜した思惑を捉え，生殖と性行為をめぐる諸議論を多方面から解きほぐし，20世紀のケニア史の再編を試みたものである。そこで描かれたことは，その時代を生きる人々がいかなる状況にあろうとも，身体的，倫理的な秩序の構築を追求しようとしたという社会の営みである。現在のケニアでは，いまだ性や生殖をめぐる議論は尽きないが，本書は過去への理解という歴史学のレヴェルを超え，そうした共時的な問題への示唆を与える一助となる存在である。

（注１）「マウマウ（*Mau Mau*）の戦い」とは，白人入植者によって土地を奪われ，無産化した人々の一部が土地の返還を求めて立ち上がり，ゲリラ活動を展開した反英運動である。イギリス植民地政府は，南アフリカから対ゲリラ戦術の専門家を呼び寄せ，５万人の兵士を投入して土地自由軍の掃討作戦をおこなった［松田 1999，213］。その結果，マウマウの犠牲者は，死亡者１万1500人，負傷者1053人，逮捕者２万6000人，そして強制収容村への隔離者107万人という数に上った。一方，白人の死者は95人に止まっている［宮本・松田 1997，441］。1956年までつづいたこの運動は，ケニア中央部のセントラル州を激戦地として大きな爪痕を残したが，イギリスからの独立の時期を早める結果をもたらしたとして一定の評価を受けている［石井 2005］。

文献リスト

＜日本語文献＞

石井洋子 2005（印刷中）.「先住民運動としてのマウマウ」綾部恒雄編『失われる文化・失われるアイデンティティ』講座世界の先住民族：ファースト・ピープルズの現在 10　明石書店.

松田素二 1999.「西ケニア山村からみた大英帝国――個人史が世界史と交差するとき――」栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験――人類学と歴史学からのアプローチ――』人文書院　197-220.

宮本正興・松田素二 1997.『新書アフリカ史』講談社.

＜英語文献＞

Bayart, Jean-Francois 1993. *The State in Africa: The Politics of the Belly*. New York: Longman.

Thomas, Lynn 1989. "Contestation, Construction, and Reconsitution: Public Debates over Marriage Law and Women's Status in Kenya, 1964-1979." Bachelor's and Master's thesis, Johns Hopkins University.

――― 1997. "Regulating Reproduction: State Interventions into Fertility and Sexuality in Rural Kenya, c. 1920-1970." Ph. D. diss., University of Michigan.

――― 1998. "Imperial Concerns and 'Women's Affairs': State Efforts to Regulate Clitoridectomy and Eradicate Abortion in Meru, Kenya, c. 1910-1950." *Journal of African Histotry* 39: 121-145.

――― 2000. "Ngaitana (I will circumcise myself): Lessons from Colonial Campaigns to Ban Excision in Meru, Kenya." In *Female "Circumcision": Culture, Controversy, and Change*. eds. Bettina Shell-Duncan and Ylva Hernlund,129-150. Boulder: Lynne Reinner.

（日本学術振興会特別研究員PD）